

## ◆久留米<sup>かすり</sup>紺を生み出した・井上<sup>でん</sup> 伝

江戸時代後期の天明<sup>てんめい</sup>8年（1788）、久留米城下の通外<sup>とおりのほかまち</sup>町で生まれた井上伝は、13歳の頃に、色あせてまだらになった着物の模様からヒントを得て「久留米紺」を生み出しました。

その後、織り機械や模様作りの技術に改良が重ねられた結果、慶応2年（1866）には、年間約一万反が久留米藩の外にも販売されるようになり、全国に広く知られる織物となりました。



藍甕が並ぶ紺糸の染場（森山紺工房）



染め上った糸



寺町徳雲寺にある胸像

## ◆発明<sup>ひさしげ</sup>にかけた人生・田中久重<sup>しげ</sup> ①



佐賀藩時代の田中久重・与志夫妻の写真。武士にとり立てられたため、刀を持っている。

もう一人、幕末から明治にかけて活躍した人物が「からくり<sup>ぎえもん</sup>儀右衛門」こと田中久重です。寛政11年（1799）に通町<sup>かんとせい</sup>で生まれ、からくり人形師として活躍しました。30代半ばに活動拠点を関西に移し、ろうそくの10倍の明るさをもつランプ「無尽灯<sup>むじんとう</sup>」など、暮らしに役に立つ製品を次々と発明します。さらに高度な技術と知識を必要とする和時計の製作にも挑戦し、その最高傑作といわれる「万年時計」を完成させました。

## ◆発明<sup>かえい</sup>にかけた人生・田中久重<sup>しげ</sup> ②

嘉永6年（1853）には、佐賀藩に招かれ、蒸気船のボイラーの製作や西洋式大砲などを製造。その活躍ぶりに久留米藩からも声が掛かり、多方面で才能を発揮しました。

明治維新後は東京へ進出。銀座に店を構え、亡くなる直前まで通信機など電気機械の製作に取り組みました。この店舗兼工場は、現在の手電気機器メーカー東芝の前身となりました。



佐賀藩での蒸気車模型の走行実験（公益財団法人鍋島報効会所蔵）



東京・銀座の田中商店

## ◆ものづくりは人づくり

これらの先人たちに共通するのは、あふれる情熱や旺盛な探究心をもってものづくりに取り組み、新たな産業を興したことだけでなく、多くの弟子や社員を育てたことです。井上伝は、その技術を2千人以上の弟子に惜しみなく伝え、田中久重から指導を受けた人の中からは、電気機械の大手企業の創業者が数多く輩出されました。

新しいものを生み出すための情熱や努力は、次代を担う人へ受け継がれ、現代の久留米のものづくりへとつながっています。

■予告/来月の展示では、田中久重の人物像に迫ります。



田中久重製作の「弓曳き童子」が、8月7日に機械遺産に認定されます。詳細は次回展示で。